

# 私たちが 考える万博

第5回

コロナ禍によって明らかになった  
日本社会の弱みと強み

コロナ禍という誰もが想定していなかった社会状況の中で、5年後に開催される大阪・関西万博に向けて何を考えなければならぬだろうか。やるべきことは数々あるが、まず必要なのは、コロナ禍後の日本社会のあり方を議論することだろう。今回は、コロナ禍によって顕わになった日本社会の弱みと強みを考察し、これからの日本社会の方向性を探りたい。

構成 加藤しのぶ



池永寛明

いけなが ひろあき

大阪ガス(株)エネルギー文化研究所顧問。1955年、大阪市生まれ。82年大阪ガス入社後、天然ガス転換部に在り人事労務、営業部門にてマーケティングに携わる。日本ガス協会にて企画部長として、エネルギー・環境制度設計対応を担務。大阪ガス入社後、北東部エネルギー営業部長、近畿圏部長を経て2016年に同研究所所長に。2019年より現職。

## コロナ禍でも 万博を開催するべきか？

「本当に2025年に万博なんてできるの？」  
今、「万博を考える」と言っても、こんな声が聞こえてきそうです。コロナ禍後の社会全体の姿さえまだまだ不透明な状況で、万博よりも先に考えなければならぬことがあるだろう、と。

そうした声に対して、「大阪で万博はできる」と答えます。むしろどんな形であっても「やるべき」です。

かつて、大阪では第二次世界大戦終戦からわずか3年後の1948年に復興大博覧会を開催しました。街は焦土と化し、氣力を失っていたわが国で、博覧会は復興への光となりました。状況は違うかもしれませんが、コロナ禍後の社会の導きとなるためにも、大阪・

関西でやるべきなのです。

もちろん、その大前提として、コロナ禍後の社会についての議論や考察が必要であることは間違いありません。そこで今回は、コロナ禍で顕わになった日本の弱みや強みについて考察し、今後の日本社会の再構築・再起動の方向性を考えていきたいと思います。

## コロナ禍は大断層 日本の弱みは「読み違え」にあった？

コロナ禍後の社会は元の社会には戻らない——このことは前号ですでお話しした通りです。しかし、表面的にはそうした考えを認識しつつも本音では「そうはいっても、いずれ元に戻るだろう」と考える人もいます。そうした人は、「人が集まっていけないならばオンライン対応すればいい」などとテクニカルな手法だけに偏りがちです。この発想こ

はそれまでの成功体験に引きずられ、前提条件を見直さずに受容したのです。何より「生活を、仕事をどうしたいのか」という視点が欠落していたことが問題だったと思います。

これはわが国がこれまで「ITやAIで何ができるか」というような、技術開発中心で考えてきたために起こった現象です。世界が「こんな暮らしや仕事をするためにITやAIをどう使うか」といったような、「ヒト」を主語にして、どんな「ライフスタイル・ビジネススタイル」にしようかと考えていることは全く異なります。

こうした日本の「モノ」を中心に据えた視点はこの「失われた30年」の根っこにあり続け、コロナ禍の今も続いています。先に挙げた「人が集まっていけないならばオンラインで対応すればいい」とテクニカルな手法ばかりをクローズアップする発想こそ、この「根っこ」が今も続いている証拠であり、コロナ禍で浮かび上がってきた日本の弱みだと考えています。

## 日本の強みである「文化力」を取り戻し、 「藝」でコロナ禍後の世界を掬う

『CEL』119号で紹介した、デンマークデザインスクールCIIDのCEO・シモナー・マスキキンは「技術と社会をつなぐのは“文化”であると指摘していました。技術中

心に考え、社会への接続を重視していない日本の弱みを克服するには、「文化力」を取り戻すべきではないでしょうか。

これまで、私が「ルネッセ(再起動)」の概念を通してお話ししてきたように、本来、日本人は「コード(本質)」を「モード(様式・方法論)」化する、つまり多様なものを融合し日本的な感性で洗練させることに長けています。式で表すならば、「機能性×精神性×洗練×多様性」となるでしょう。そして、コードをモード化し、式を融合させるために必要になるのが「文化」であることもこれまで何度もお話ししてきた通りです。

デジタル技術、AI等を超える、人でしか感じられない「超」センス・感性で生み出される文化力を核に「関西プロトコルII日本スタイル」を再起動しようという「ルネッセ」の概念から導き出されたのが、前号の最後にお話しした「藝で世界を掬う」というキーワードです。

ここでいう「藝」とは、芸術の「Art」、科学技術・技巧・技術の「Techno」、文化・文芸の「Culture」、楽しませる芸能の「Amuse」などの個々の「藝」、さらにはそれらを統合した意味をも含んでいます。「掬う」とは、川から水を掬い喉を潤す、池から金魚を掬い別の観賞池に移すというように、もとある雑多な事象からより特別で純化

そが、このコロナ禍で見えてきた日本の「弱み」ではないかと思えます。そしてそれは、我々日本人が何かを「読み違え」たことに起因するものだと私は考えています。

「読み違え」はデジタル技術を中心にした革新的技術が生まれつつあった1990年頃に遡ります。当時我々はすぐれたデジタル技術により社会は発展し、経済はさらに向上していくと信じていました。しかし実際はそうならなかった。これは当時の日本が技術の使い方を読み違えたからではないかと思うのです。それまでの日本は右肩上がりに成長していた時代です。そこにデジタル技術革命が起こりました。世界はデジタル技術の導入にあたって社会・ビジネスの基盤とルールを変えました。それは、「こういう社会に変えていくために、デジタル技術をどう使うか」というビジョンがあったからです。しかし、日本

した価値をひきだすことです。

「藝」の多くは日本、ことに関西で育まれてきたものです。たとえば大阪料理はその象徴といえますし、「Techno」の「藝」ならば堺の鉄砲や包丁といったモノづくりの歴史が、また「Amuse」の「藝」には能楽や人形浄瑠璃などがあげられるでしょう。シルクロードの終着点としてさまざまな文化が、混じりあいながら洗練・多様化し続けてきた関西の歴史。その中で育まれた多様な「藝」から本質を読み解くことが日本の強みである文化力を取り戻す道になるのです。

ただ、今の時点でそれぞれの「藝」はバラバラに存在しており、統合されていません。これらに現代の視点で新しい息を吹き込み、縦横無尽に、新たな価値をつないでこそ、コロナ禍後の日本の再起動が可能となり、さらには大阪・関西万博が果たすべき使命も見えてくるように思います。

緊急事態宣言中、世阿弥の『風姿花伝』を読み返しました。なかでも「能を見ること。知ることは心にて見、知らざるを目にて見るなり」の一節をあらためて咀嚼しています。これはコロナ禍後社会の論点でもあるリアルとバーチャルの融合、「藝は世界を掬う」の核になる概念ではないかと考えています。このことも含め、次号にて掘り下げていきたいと思っています。